

府立大山岳部の 2006 夏合宿
N 島+菊神さま+F 井 (WV) +イジラ

大学の時間割変更の影響で、いまごろは頼みの 4 回生が院入試直前のため参加しづらく、大学院生が払底してしまった今年は、彼らが若手OBとして参加してもらえないとなると活動レベルを維持するのがなかなか苦しい。

8月7日

折立7時-太郎平-薬師峠13時

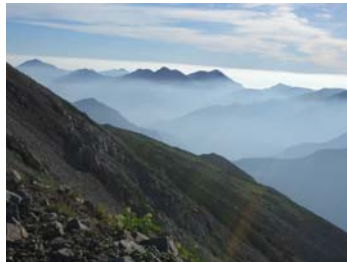
この日はまだまだ元気だったが、20kを超える荷物がいかにも重く共同装備のうちのエピ岳1個と米2kを1回生にもってもらおう。6Dに行きたいという2回生につきあうために持っているハンマーやカラビナ類のギアが重く、すでに負け犬。



8月8日

薬師峠 5時半-薬師岳7時30-ザラ峠12時半

新人の一名は、高校時代に運動歴がなく進まない。6年前は、このまま五色平まで到達したが、無理と判断し沈。暑い。オーストリア人とドイツ人のカップルがいる。当然、ビールを飲んでいる。



8月9日

ザラ峠6時-五色平12時

6時間は、かかりすぎ。とは思うが、越中沢の登りで、疲れを感じてしまう。日差しがきつく暑い。

8月10日

五色平(5時) - 立山-真砂岳-別山-剣沢-真砂(16時)



ザラ峠から登り切ると、ブロッケン。

それはいいのだが、次第に学生のペースについていくのがつらくなる。かれらが竜王に上っている隙に、一の越まで降りてしまい長く休もうとするが日陰がなく休まらず。雄山を一気に登れないことにショックを受けた。暑くて本当につらい。剣沢への下降点までで学生たちと30分近く離される。一回生も道を歩くだけならイジラより速くなる。さすがに雪渓は、こちらの

ものでへたる1回生を見ながら下降。真砂にはネギ、ちゅぱ率いるルームのテントがある。山で、ルームの連中に会うのは初めて。7月よりかは大学がいる。

8月11日

真砂8時—真砂沢—硯ヶ池14時—剣沢—真砂16時

真砂沢が珍しくつながっていたので登って、別山沢を下降するつもりで散歩に出る。入ってみると、夜の間に入り口の滝のところで崩落している。左岸を巻いて、フィックス15mで雪渓に下りる。しばらくいくと再び割れているので、20mフィックス



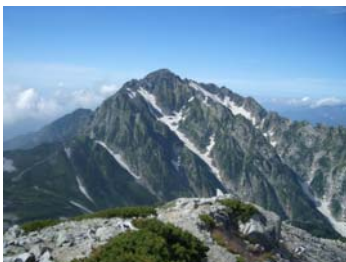
で左岸を低く巻く。

雪の上をどんどん行く。硯池あたりから大きな雪面がつづいているので、こっちが早



いかと取り付くが150mほどあがると上でクレバスが開いており、左側のハイ松の尾根に逃げる。新人は、ハイ松とガレの尾根に難渋している。

ようやく硯池まで到達したら帰着予定の14時。平蔵を下る練習と思っていた別山沢に入るために尾根を下る。



意外にてまどってしまい、2回生のルートファインディングもあやしく、右に別山沢左に剣沢小屋のCOLまできたらもう15時である。1回生の疲労が強そうだったので、別山沢上部ではザイルを出す必要を感じ、めんどろになって剣沢小屋にむけて一気に6-70mくだり、小屋の裏から剣沢にくだり、帰着。思いのほか疲れた。

8月12日

真砂6時—6峰Cフェース剣稜会(9時30分から13時)—真砂16時

ルームのネギによると6Dは取り付き不能とのことで6Cに。

ハンマー2本も要らないしカラビナも、こんなにいらぬ。6Cだったらこんなにここまで持ってくることもなかったのにとさらに疲れる。

夜半から明け方にかけて雨が降る。農大の体操の声を聞いてから、おや止んだのかと準備。

出発が遅れ6時発。取り付き9時過ぎ。

軽装で長治郎の出会いまで1時間近くかかるのだから、情けないことこの上ない。

先行は、2パーティ。いずれも熊岩の上にテントを張って寝ている連中。

壁に取り付こうとしたところ、雨になる。雨具をつけてしばらく様子を見るが、小康状態になるし、ここでやめるとこの登攀だけを楽しみに歩いてき2回生があまりにかわいそうなので、のぼりはじめる。



最初はノーザイルであがり、途中からザイルをつける。40mと50mいっぱい登らせたところで、雨になる。どうするかと思ったが、思っているうちに小康状態に戻ったので、登ってしまう。次の50mを登りきったところで再び雨に。



あせった2回生がもたもたするので、イジラがリードにでて終了点まで。

雷が早月側で鳴っているのが聞こえる。すぐに下降を始め、50mアプザイレ一本。5・6コル方向に斜めに降りるが、記憶と異なっており、ルンゼにはいるのに、10m懸垂に追い込まれてしまった。取り付きに戻るころには、晴れており物を乾かしてから下降。

三の窓から平蔵をまわったルームの連中は、ブルーシートに1回生を包んで、なにやら縛ったりしている。ルームは合宿打ち上げ。

8月13日

真砂5時半ー源治郎取り付き7時ー本峰13時ー平蔵ー真砂16時

全員で源治郎へ。

昨日から、お盆休みの影響で社会人が増えてきた様子。案の定、源治郎には、どっさり人がおり、さらにレベルもまちまちで、時間のかかるパーティを中間ルンゼから追い抜こ

うと無茶をするパーティが続出し、わけのわからないことになっている。



取り付き早々の岩場が登れず、ザイルを出してのぼる 10 人パーティや 6 人パーティが続出。途方もなく時間がかかる。Y 懸尾根程度の岩がノーザイルで登れない人を連れてくるのは、あまりに非常識に思える。一方、多少自信があるのだらうけど、こうしたパーティを追い越そうとして下から中間ルンゼに入ったり、途中から中間ルンゼに入るパーティが続出する。ところが、中間ルンゼ自体が、崩壊でずるずる滑りながら登らねばならない単に危険なだけの場所で、さらに危ないことに尾根を通るパーティがへたくそなので、ガラガラと石を落とす。ルンゼ内のパーティから石を落とすなという声が聞こえるが、そのリスクはあんたたち織り込み済みでそっちにまわったんじゃないのかよといたくもなる。

上から見てみると中間ルンゼは、コルにあがるところが、ざらざらの土壁とぼろぼろの岩、ガレの堆積と年々ひどくなり、危険きわまりない。何人かが動けなくなり、先にコルにあがったおじさんがザイルを投げているが、その行為自体も落石を誘発する。

渋滞に閉口しつつも尾根を登った我々が結局先行する事になるので、中間ルンゼは本当にお勧めではない。



I 峰で少し休んでから II 峰にあがると、大渋滞。懸垂待ちなのだが、20 分待っても 30 分待ってもいっこうに進まない。まさか、懸垂すらも初めての人を連れてきてるわけじゃないだろうと思うが、それにしてもなにをやっているんだか。

「～ちゃっ」を連発するおじさんが業を煮やして後ろから下

降点まで行く。なにやら様子を見ている。それでも進まない。イジラもいらいらしてきて前に出してみると、ザイルに ATC をセットしてから下降にはいるまでに、こわごわやっているヒトの連続である。

横を見ると冬の支点があるので、ぼくらはこっちからおりますとってザイルをセットさせ下降する。



これで 50m2 本持っているパーティは、こっちからおりられるわけで、渋滞は解消かと思っただが、本峰に着くときに振り返ってみてもまだ II 峰の懸垂待ちが続いていた。



カニの横ばいを経由して平蔵のコル、そこからアイゼンを付けさせて平蔵を下り真砂に帰着。それにしても、一部高齢者の横柄なことといったら、開いた口がふさがらないのである。

どれほどの経歴があるのか知らんが、自分のパーティの力量のなさを棚に上げて一言多い。「あんたに言われたないわ」と怒鳴りかえしたろうかと思うことが多々。

8月14日

真砂—仙人池—阿曾原



すっかり菊神様はたくましくなりました。

8月15日

阿曾原—樺平